

三条・栗田口と刀匠伝説――都からみちのくへの入り口に――

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-06-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野崎, 準 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24104

三条・粟田口と刀匠伝説——都からみちのくへの入り口に——

野 崎 準

- 一、はじめに
- 二、三条と粟田口の史跡
- 三、三条と粟田口の刀工伝承地
- 四、刀工の作業場とその遺構
- 五、日本刀の成立と三条・粟田口
- 六、おわりに

一、はじめに

京都と東北の関係を追いかけてみると、平安京の中央から東山を越えて東国に向かう道沿いの地域に鍛冶、特に刀工の伝承地が多いことに気がついた。

京都は中世に商工業都市として発展した左京に「鍛冶町」の地名が多く、土木・建築工事の他にも、工業の中心であった繊維産業関連の、針・ハサミなどの裁断刃物や紡織器具製作の木工道具などの関連金属工具の製作が盛んであったといえ、それまでであるが、一般の城下町の鍛冶町と違う刀剣鍛冶工房の伝承地が多い。これは何

か特別な理由があるのかと調べて見た。

その結果平安時代にさかのぼる刀剣鍛冶の居住伝承地が東国への入り口にあたる三条・五条から左京と東山の間の粟田口に多いことに気がついた。そして地名が後世の文献のみならず刀剣の銘として同時代金石史料としても残り、刀剣研究史の上でもこの地域が重視されている事にも注意してまとめて見ることにした。

二、三条と粟田口の史跡

観光都市京都の東の繁華街、上京区寺町から三条大橋にかけては商店街に観光土産店が集中し、新京極にも近く修学旅行生で賑わっている。三条大橋は東海道、東山・北陸道の起点、江戸から見ると終点で、江戸時代には都から東の諸国への出入り口であった。そのため三条大橋周辺には史跡も多く、林子平・蒲生君平と共に寛政三奇人の一人である高山彦九郎の京都御所望拝像、『東海道中膝栗毛』の弥次喜多像、それに池田屋騒動跡地、佐久間象山、坂本龍馬、大

村益次郎の遭難地などの石碑や説明板が道路脇に見られる。

この付近は寺町の地名から知られるように豊臣秀吉の京都改造時に、鴨川沿いに寺院が集中して移転された場所で、明治以後いくつかの寺は移転し、新京極がおかれて劇場・映画館・飲食店の並ぶ繁華街になった地区である。劇場・映画館は消えたが、寺院は現在も本能寺、誓願寺など大寺院が残っている。

鴨川にかかる三条大橋は、もとは小規模な橋だったが、天正十七年（一五八九）、小田原出陣の時秀吉の命令で増田長盛により花崗岩の橋杭をもつ大規模な三条大橋が架けられ、徳川幕府の五街道整備の時には東国からの諸街道の終点に定められた。

しかし三条大路は古来、平安京時代からの東国への主要な出入り口で、京都の貴族たちも近くは近江石山寺、三井寺、遠くは伊勢神宮への参拝などにここを利用している。京都七口の内でも「東を向いた都」平安京にとってはきわめて重要な地であった。

三条大路の外れから鴨川を渡り東に進むと白川の橋があり、そこから東山越えの山道にかかる蹴上までは古代の愛宕郡下粟田郷、京都七口が定まるとその一つ「粟田口」と言われ、そこから東山を越える山道は「日ノ岡越え」といい山科盆地に通じた。道はそこから盆地を横切り、近江国の大津宿へは更に逢坂山を越えた。逢坂山の手前、追分は伏見・奈良方面への街道と大津・三井寺方面への間道の「小関越え」が分岐し、大津方面への街道には古代には「逢坂の関」が置かれていた。この付近は江戸時代から近江国が山城国に突

出しており、現在も京都府内に滋賀県が突出している。都往還のもう一つの重要な地点であった。

日ノ岡峠、逢坂峠とも傾斜はかなり大きく、古代から険しい部分の切り下げ工事が行われ、また琵琶湖を使い大津に運ばれた北国からの貨物を京都に運ぶ牛車のため江戸時代には路面に車の幅に合わせて溝を掘った「車石」が敷かれた。現在でも道路両側の公園・社寺の庭石、石造文化財の基礎石などに転用された車石がよく見られる。

なお、東山を越え山科に至る道には平安京羅城門を出て東に進み、現在の東山区今熊野付近から東山を越える「醍醐道」「滑石峠越え」と言われる道もある。また五条大路の東、平氏の六波羅屋敷、鎌倉時代には六波羅探題のあった東山区馬町付近から山科に抜ける間道、「洪谷（滑谷）道」も日ノ岡越えが整備されるまでは東山越えに利用されていた。共に山林中の苔むした滑りやすい道だったと言う。

この粟田口が都から東国・東北への入り口、という感触は京都人にもあったようで、京都の地誌類には『夫木和歌集』の

みちのくち粟田の山に秋きりの たちのる駒もちかづきにけり

（好忠）

を引用している。現在の歌枕の研究書は「みちのくち」は「陸奥国への入り口」という意味ではなく、場所も粟田口ではないとして

いるが（註一）、駒が旧八月、秋霧の立ち始めた中を陸奥国の牧から貢進されて都に上る馬のこととすれば、「みちのくの出入口」という解釈もできるのではあるまいか。

昔は三条大路が上京・下京の境とされた。現在の京都市中京区と下京区の境は道幅の広い四条通りであるが、この二大路の周辺には東国に關係する伝説地がいくつかある。四条通りの下京区綾小路には神田明神の小祠があり、乱に失敗して倭藤太秀郷に討たれた平将門の首がさらされていた地と伝える。伝説では将門の首は再起を宣言して離陸、東国へと飛行したが尾張の熱田神宮、または美濃の南宮大社の神に撃墜されたと言う。また三条弁慶石町には武蔵坊弁慶ゆかりの大石があり、奥州にちなむ話を含む多くの伝説が記録されている。

三条大橋を東に、鴨川を渡ると粟田郷であるが、近世は知恩院の手前、白川橋から東を粟田口と言った。征夷大將軍としてたびたびの東北出陣で活躍した坂上田村麻呂が弘仁十一年（八一）五月二三日に死去した「粟田別業」（『日本後紀』）の場所は不明であるが、平安時代初期に東北経営に力があった人物が東国の入り口近くにいたと言うのは興味深い。その墓が日ノ岡を越えた宇治郡来栖村に定められ、甲冑を帯びて立ったまま埋葬されたというのは死後も平安京を東国の脅威から守るという意味があるのだろうか。後世に「桓武天皇が都を守るため鉄の甲冑を帯び弓箭を持った武將の塑像を埋めて塚を築いた」と伝える東山の「將軍塚」も粟田口と都の双方を

にらむ東山の山上にある。

またこの付近は貴族の別邸もおかれた。摂関政治初期の重要人物、藤原基経（八三六～八九一）の山荘は粟田口の北、岡崎付近とされている。ただし清和天皇の崩じた清和院、後の円覚寺が基経別荘の跡地とされているが、清和源氏の信仰篤く、たびたびの変転の後嵯峨野に再建された円覚寺では「再建前には左京区下池田町にあった」と伝えている。ここは岡崎より更に北で粟田口よりは離れている。藤原道長の兄で関白就任直後に没した藤原道兼（九六一～九九五）も粟田殿と呼ばれ、ここに別邸があったらしい。あるいは東国からの情報や荘園からの貢納物を一刻も早く入手する為だったのだろうか。

またこの付近は東国から峠を越えて都に攻め込む最終・最大の隘路でもあるが、中世になっても防備の為の大きな城塞が建設されていない。比叡山方面から上京に直行できる志賀街道の出口には勝軍地蔵城が築かれ、その他東山の随所に小規模な城はあるが、日ノ岡越えを扼する大きな城はない。そういえば大坂方面から京都盆地に入る南の隘路、大山崎付近にも淀城以外には大きな城は無い。粟田口道の南には徳川幕府が大伽藍を建てた知恩院があり、よく「知恩院は石垣や築地を回し、東からの侵攻に対する備えであった」と言われるが、「京は攻めやすく守り難い、敵にここまで攻めてこられたら終わり」と最初から防御は考えていなかったのかも知れない。

粟田口周辺には他にも街道沿いに史跡、伝説の地が多いが、気になるのは鍛冶町の地名や刀剣・鍛冶に関する伝承が多い事である。

特に日本刀の成立期である平安時代中期から名刀の輩出した鎌倉時代の伝説が多いのも興味深い。東国の開拓には武器のみならず農具など金属器が必要で、しかも開拓地の風土・地質に合わせた改良も必要である。ならば地方からの情報を受けた鉄鋼製品の技術的改良が都の入り口付近で行われていたことが、この古刀剣伝承地の研究から明らかになるのではないかと考えた。

そこでわずかな記録に残されている「東国の入り口の刀工伝説」を探ってみることにした。

（註一）吉原栄徳『和歌の歌枕地名大辞典』おうふう、平成二〇年 他

三、三条と粟田口の刀工伝承地

京への入り口として粟田口の賑わいが記されているのは鎌倉時代成立という『宇治拾遺物語』（註二）の正本一に

是も今は昔、越後国より鮭を馬におふせて甘駄斗粟田口より京へをひいれけり。それにあはたぐちのかちがゐたる程に……

と、粟田口に鍛冶工人がいると記されている。その悪童の一人が鮭を盗んだことが発覚して悪態をつく話である。

近現代の京都名所案内には刀剣への興味が高まった時代を反映し、粟田口と三条の刀匠に関する記事が見える。京都叢書を通読するとまず『扶桑京華誌』（註三）に、

○宗近鉄盤石 在慈鎮石南数十歩。相伝宗近者鍛冶之良匠也。旧居地也。其所制作利剣、世之珍奇也。此地則三条東故俗云三条小鍛冶。未知石之然否。

と、日本刀成立期の刀匠三条小鍛冶宗近の遺跡が粟田口にあると記している。

『山州名蹟誌』（註四）には

○小鍛冶鑪盤石（ロバンセキ）（知恩院）山門石垣ノ下西南方ニアリ。側ニ井有り。此水則刃（ヤキバ）に用ヒシト。是土人ノ口説ニテ実記未考。円山ノ僧ノ云。此石昔は丸山ノ吉水ノ傍ニアリト。昔ヨリ剣刀ヲウツ時、神社仏閣ニ祈リ清浄ノ地に居シテ是ヲナス事今ニ至レル例也。但シ此ノ所、鍛冶宗匠ケ宅地ト云ハ非也。

石は丸（円）山の吉水（現在の円山弁財天堂）から知恩院山門そばの井戸の地に移されたとする。

また同所粟田口天王社（粟田神社、粟田口鍛冶町）の項に



【図版二】 栗田神社境内社 鍛冶神社
三条小鍛冶宗近の工房伝承地。
環境整備後の例祭
2018年 8 月 5 日撮影。



【図版一】 栗田神社本殿 京都市東山区
栗田口鍛冶町

○小鍛冶宅地 伝云、天王鳥居北竹林所ト。鍛匠宗近、又栗田口藤四郎トモ称ス。世知處也。

栗田神社は栗田口の大きな神社だが、三条通に面する鳥居の脇に「鍛冶神社」があり、そこを三条小鍛冶の宅跡としている【図版一、二】。元は駐車場の隅に社殿と明治天皇歌碑、井戸跡を示す石組があるだけであったが、平成三十年に漢詩を刻んだ石碑を追加し玉石を敷いて整備された。鍛冶神社の例祭は八月第一日曜である。

『雍州府誌』（註五）には

安養寺 在円山、旧天台宗之寺也。慈鎮和尚暫住焉。山下在吉水故称吉水和尚。此水至清全也。相传三条小鍛冶宗近制刀。用淬此水云々。

とある。この安養寺の旧地は知恩院の南、円山公園の北の前記円山弁財天堂の所にある。慈鎮和尚（慈円）ゆかりと伝える石宝塔、法然、慈円ゆかりの吉水の井【図版三、四】、不動を祀る池とともに「鎌倉時代の刀工栗田口藤四郎吉光が弁財天の相槌を得てこの名水で作刀。社殿の下に鐵砧（かなとこ）石が残る」と由緒書きにある。

『雍州府誌』にはまた



【図版四】吉水并財天の井戸。
法然、慈円と栗田口吉光の伝承がある。



【図版三】円山公園の北にある吉水并財天。
栗田口吉光の伝承地。

後述するが、打ち物鍛冶、刃物包丁類の製作には炉、送風機、鉄床（金床）などがあれば十分で、砂鉄製錬のような大がかりな設備はなく、遺構も残りにくい。ただし刀剣に焼きを入れる熱処理には清浄な水が必要とされ、名刀工ゆかりの地には名水の井戸が多く



【図版五】知恩院山門前の井戸。
ここも三条小鍛冶宗近の伝承地。

小鍛冶宗近鉄盤石 在知恩院西門内。其地東三条にて鍛工宗近打刀處也。故号三条宗近。
知恩院の巨大な山門前の石段脇、向かって右の芝生の中に今も石の井戸がある。門の大修理後、説明板はなくなったと記憶するが、案内記には「三条小鍛冶宗近の井戸」とある【図版五】。

残っている。

『拾遺都名所図会』（註六） 粟田口の項に

小鍛冶宗近水 【旧所仏光寺墓所。門前の西石垣の下にあり】 此地いにしへの宗近の宅なり

とぞ。

『京羽二重織留』（註七） 奇石の項に

○鐵盤石 知恩院にし門の内にあり。此地いにしへ東三条にて小鍛冶宗近が刀を打ちし所なり。此石則刀を打ちし重石也。

『京町鏡』（註八）に

△中之町 此道の南側に一間に一間許の宅地有。是古三条小鍛冶宗近の宅地の跡也俗に云伝ふ。

この類の記事は他にも多いが際限がないので重要なもののみを挙げた。

明治に糸物商の傍ら有職故実、郷土史研究にも活躍した碓井小三郎が丹念に資料を集め、近世京都の名所案内の集大成ともなった『京都坊目誌』（註九）の粟田口の記事には

下京第八学区

（粟田口分木）小鍛冶の宅址と云へるあり。刀匠三条宗近の居所と云。或は粟田口吉光の宅とも云へり、宇治拾遺物語に曰く……（中略）鍛冶の池百余年前なお存すと。

上京第二十七学区

鍛冶池 良見寺境外東北角十三番地。僅に四坪の小池残る。……因に言ふ、小鍛冶鉄盤石、小鍛冶の井は知恩院地内にあり。合鍵稲荷社は粟田神社鳥居の地にありしが今下京区に属す。

古跡 鍛冶宗近の宅址

字鍛冶 粟田神社華表の北。今竹林に在りと。宗近、粟田藤四郎と称す。山城国の人。刀匠の名人たること世の知る所なり。長和二年没す。年七十七。

古刀鏡云……（系図省略）

鍛冶吉光の宅地 字鍛冶の西角にありと。或は云ふ宗近吉光同地に住せしとも。

鍛冶藤四郎吉光。左兵衛尉国吉の子也。宗近に亞ぐ名匠なり。

粟田口鍛冶……（系図省略）

これが粟田神社の境内社鍛冶神社付近のことであろう。さらに粟田神社の北、民家の中に「相（合）槌稲荷」社があり、謡曲「小鍛



【図版七】栗田の鍛冶神社に存在した「井戸」か「池」を示す(?)石組。現在は水道栓だけが残る。



【図版六】相槌稲荷社。謡曲『小鍛冶』伝説に因む小祠。

「冶」で稲荷神の使いとして相槌を打ち宗近の作刀を助けた狐を祀るとしている。現在も民家の隙間に小祠が残る【図版六】。

栗田口周辺の刀工にまつわる伝承は、刀匠名が平安時代の三条小鍛冶宗近、鎌倉時代の栗田口藤四郎吉光、その工房と伝えるのは知恩院の山門脇、さらに南の円山公園の北、弁天堂の吉水の井付近、栗田神社境内鍛冶神社のあたり、となる。街道沿いのよろず打ち物製造・販売の野鍛冶の居住地よりやや離れた、丘陵上の湧き水に恵まれた所である。栗田神社の刀工居住伝承地にも昔は池があったといい、最近まで井戸か池の跡を示すような石組があった【図版七】。

(註二)『宇治拾遺物語』渡邊綱也校訂 岩波文庫 一九八五年版

(註三)『扶桑京華誌』寛文五年(一六六五) 新修京都叢書 第二卷

(註四)『山州名蹟誌』沙門白慧 正徳元年(一七一一) 新修京都叢書 第一五・一六卷

(註五)『雍州府誌』黒川道祐 貞享三年(一六八六) 新修京都叢書 第十卷

(註六)『拾遺都名所図会』秋里籬島 天明七年(一七八七) 新修京都叢書 第七卷。仏光寺に井戸や池は残っていない。

(註七)『京羽二重織留』孤松子 元禄二年(一六八九) 新修京都叢書 第二卷

(註八)『京町鑑』廬田鈍水 宝暦四年(一七〇七) 新修京都叢書 第三卷

(註九)『京都坊目誌』碓井小三郎 大正五年(一九一六) 新修京都叢書 第一七・二二卷

四、刀工の作業場とその遺構

刀剣鍛冶への一般の興味が広まるのはやはり江戸時代、武士階級の権威の象徴となつてからのものであり、刀剣の製作技術研究も新刀期に入り、平安時代後半の日本刀成立期、名刀の続出した鎌倉時代の技術はすでに失われていたところである。

「文人は武器を論ぜず」の中国と違い刀剣製造技術にも興味津々だった日本の武士は古刀の復元製造にも関心を持ち、多くの刀剣技術書が書かれた。

その伝統を伝える現在の刀剣工房は屋内で、建屋は長い柄の鉄槌を振り上げる鍛造作業と防火のために天井が高く煙出しがある。作業場の土間の一方に耐火度の高い粘土で炉を築き、これを「火床」という。野鍛冶の炉は製造する物の大きさに合わせ炭を盛り上げて大きさを変えるが、刀工の場合は主に細長い棒材の加熱なので炉は細長く左右に壁のあるものもある。刀工は炉の手前に座り、その左に送風機「鞆」を置く。古代の鞆は文字の通り革袋であったが、中世までには杉の薄板を組み合わせた手押しポンプ型の「箱鞆」になる。鞆の風を吹き出す口に竹や木の送風管をつけ、その先に耐火度の高い粘土製の「羽口」をつけて、炉の底から風が吹き出すようにする。炉と鞆の間に防火壁を作る。

刀工から見て炉の右側に鍛造用の鉄床を置く。大きな四角い鉄の

塊で上面には鋼を鍛接し焼きを入れて硬くしてある。数人が鉄鎚で強打するので地下を大きく掘り小石を並べた上に太い木の根を据え、その上に鉄床を埋め込み、地上には鉄床の上部だけを出す。その前は相槌を打つ作業場となる。

刀工の左後方には加熱した鉄を挟む「鉗（かなはし）」や灼熱した鉄を叩く鉄鎚、鉄を切るタガネなどの置き場があり、右には水桶、炉の向こう側には小さく切った木炭を置く場所がある。

その他周囲には熱処理用の大きな水桶、研磨用の砥石とその台、ヤスリ台なども置かれる。

筆者は刀匠の工房の他、大工道具、草刈り鎌、タンスの鉄金具、蹄鉄などの鍛造工房を多数見てきたが、何れもきわめて簡素な、廃業したら遺跡としてはほとんど痕跡を残さないような設備であった。鉄鋼鍛造による刃物の最高傑作と世界が認める日本刀の製造法については多くの権威ある研究があるので、ここでは要点のみを述べる。

材料の鉄は含有炭素の量により軟鉄（炭素〇・〇〇七％以下）、鋼（炭素〇・〇〇七～二・〇〇％）、銑鉄（炭素二・〇〇％以上）に分けられ、鋼は低炭素鋼、中炭素鋼、高炭素鋼に区分される。現在には用途によりマンガン、クロム、ニッケル、モリブデンなどの金属を加え合金鋼とするものが普通であるが、当然伝統的な鍛造技術ではほとんど問題にならない。

軟鉄は柔らかく靱性も大きいが、鋼は結晶構造が変わるまで加熱し急冷することにより硬く鋭利にする事が出来る（焼き入れ、淬）。

「鉄は熱処理により、青銅より遙かに高性能の刃物を造れ、しかも銅製錬の技術があれば、遙かに埋蔵量が多い鉄鉱石から容易に製錬できる」のは古来鉄器時代の開始について論じられている所である。

現在セラミック、各種金属の合金、酸化物、窒化物などの硬い新素材は多数開発されているが、高い硬度でしかも靱性を持ち「折れず曲がらずよく切れる」素材はやはり炭素鋼が最高であるという。

日本の鉄製工具、刃物は本体を軟鉄で作り鋼を「刃鉄」、すなわち刃の部分に使う。刀剣の場合は「合わせ鍛え」といい、芯を軟鉄、刃と側面を折り返し鍛造した鋼で作る、刃の部分に焼き入れを行う。折り返し鍛錬の技法で刀身の地肌模様が生じ、粘土（焼刃土）で覆った刀身を焼き入れることにより刃部に刃紋が形成される。

刀匠はこの刀身を荒研ぎし、銘を入れて研ぎ師に渡す。そこで仕上げ研磨された刀身は鞘師により柄・鞘・鍔（はばき）・鐔等の刀装具をつけられ、注文者に渡される。

一般の鍛造品でも鍛冶職人は親方について学び、独立後は自分の工夫により他をしのぐ製品を作ったのであろうが、一子相伝の刀剣製造の技術は門外不出、明治の廃刀令、近代金属学の伝来後によりやく秘伝書の公開、公刊と金属学的研究が始まった。この時代には日本刀の評価が欧米にも広まり、日本の金属学揺籃期の研究者も揃って日本刀の技術に言及している（註一〇）。

江戸時代の人々も実用兵器としての刀剣の研究を行っていた。平和な時代でも、たとえば赤穂浪士の討ち入りの後に、使用された刀とその刀匠銘、切れ味などが話題になっている。武士たちは刀剣鍛冶の仕事場を見る機会もあり、儒学の文献に散見される中国古代の名剣の製法（これには『呉越春秋』が青銅器と鉄器を混同しているような、文人による不正確な記事もあるが）も参考にして記録している。ただし一般の文学ではあまり正確な記事はない（註一一）。

中国三国時代の『太平御覧』に収められた蒲元の伝記に、諸葛亮孔明のために刀三千振を鍛えた時、「漢水（揚子江）の水は鈍弱にして淬（焼き入れ）に向かない」と蜀の成都まで水を取りに行かせる話があり、名刀の製作に名水が必要というのは理解されていたようである。

また鉄床は適当な硬い大石で代用されていたようで、鉄床石の伝承が残った理由であろう。

（註一〇）近重貞澄『東洋鍊金術』内田老鶴圃 昭和四年（一九二九）

俵 国一『日本刀の科学的研究』一心堂 昭和二年（一九五三）
本多光太郎『日本刀製作の研究』『博物館研究』昭和十三年（一九三七）十一月号 など

（註一一）記録する文人に刀剣製作の正しい知識がないと、灼熱した刀剣を水で急冷する（焼き入れ）事を示す「淬」「淬」（共に さい・にらぐ）等も意味不明になる。

刀剣の焼き入れはどうも一般の人々には理解できなかったよう
で、『太平記』巻十三「兵部卿宮薨御の事附干将莫耶の事」に古代中国の名工干将による刀の焼き入れが説明されているが、その焼

き入れの場面、「龍泉の水に淬して」を「にぶらして」と意味不明の読み方をしている。角川文庫版の岡見正雄氏の校注ではこの部分が

西源本太平記「龍泉の水を汲み三年淬（キタヒ）て」

玄 本「龍泉ノ水ヲ淬（ク）ミ三カ年ケ内ニ」

神 本「龍泉濕シ雌雄ノ二ノ劍ヲ」

内 本「龍泉ノ水ニ淬テ三年ノ内ニ」

とまちまちであるとしている。太平記語りも炭素鋼の熱処理などは知らなかったのだろう

なお鋼の熱処理では「大切なのは水温ぐらい。硬水・軟水などの水質は関係ない」と専門家の方から聞いた事がある。

五. 日本刀の成立と三条・栗田口

（一）三条・栗田口居住とされる刀匠

日本の鉄生産とその加工、特に海外からも評価されるその製品については古くから刀剣を中心に技術史的な研究が行われた。これは明治以後の近代金属学、鉄鋼工学の研究でも注目され多くの研究がなされて来た。特に日本の鉄鋼産業が戦後の復興を終え、臨海工業地帯の大製鉄工場から優れた素材・製品を世界に輸出し始めた時代以後は考古学、文献史学の発展期とも重なり、弥生・古墳時代の鉄製錬・加工遺跡、中・近世の砂鉄製錬遺跡、鍛冶・鋳物工房の発掘と、過去の知られざる鉄の歴史が明らかになって来た。

その時代に注意された事の一つに、古代の反りのない直刀から反りのある太刀が平安時代中々後期に成立すること、その技術は武士

の時代の始まりである鎌倉時代に大いに発展、今日の科学的研究によってもなお復元できない優れた刀剣が多数残されていること、その発展の中心地が「山城鍛冶」と言われる京都とその周辺の刀工たちによってなされたらしい事が知られて来た。

戦前の文献史学、刀剣鑑定書の研究と、將軍・大名の秘蔵を解かれた多くの名刀剣の調査をされた本間順治（薫山）博士は名著『日本刀』（註一二）に反りのある日本刀の成立に在銘の伯耆安綱と共に永延（九八七〜九八九）ごろ作刀と伝える三条小鍛冶宗近をあげ、平安時代の諸国の良工として、

山城 三条系二宗近、吉家、近村、兼永、国永【吉家以下何レモ宗近ノ流デアル。兼永・国

永ハ京ノ五条ニ居住シタト伝ヘテ五条ヲ冠シテ呼バレテキル】。

とし、他の地方として伯耆（安綱・真守）・備前・備中・豊後・薩摩を挙げている。

続いて鎌倉時代には山城の刀工を

栗田口系二久国、国安、国綱、則国【以上初期】、国吉、吉光【以

上中期】、

来 系二国行、国俊【以上中期】、来国俊、光包、了戒、来国光、

来国次【以上末期】

綾小路系二定利【中期】、定吉【末期】

栗田口、綾小路ハ居住地ノ地名

として、他の国は鎌倉時代からの古刀の五伝（山城の他大和、備前、相模、美濃）とされる地域の刀匠を挙げている。

本間博士と同時代に東京国立博物館で名刀を多く調査観察された佐藤貫一（寒山）博士の晩年近くに著された『山城鍛冶』（註一三）では山城の古刀の刀匠居住地として西洞院、大宮、三条、四条、五条などの通りを挙げ、平安時代の刀匠は三条・五条に、鎌倉時代から南北朝時代には粟田口派が粟田口にいた、来派以下の居住地は不明、とする（補註）。

佐藤博士によると三条の刀匠は一条天皇（在位九八〇・寛和二年（一〇一四・寛弘八年）の時代、永延年間（九八七・九八九）ごろに作刀とされているから、藤原道長の出世しつある時代でもある。『古刀銘尽』には三条小鍛冶宗近の子・弟子に吉家、在国、二代宗近があり、在国の子・弟子に兼永・国永がいたとされる。

宗近の代表作は徳川將軍家伝来の国宝「三日月宗近」で、後に酒井家より皇室献上の太刀、岐阜県南宮大社の太刀などが現存し、「三条」の銘を持つ物もある。更に能『小鍛冶』では稻荷明神の助力で名刀「子狐丸」を製作したなど伝説も多い。山城鍛冶の代表で、武家政権以前の作品ということもあるのか京都の伝説にもしばしば登場し、祇園祭山鉾巡行の「長刀鉾」の竿上の大長刀はもと宗近の作を用い、源義経・弁慶主従の佩刀も宗近作であったと伝える。

興味深いのは東国、東北地方までにも「三条小鍛冶宗近が訪れて作刀した」という伝説があることで、『鳴子町史』（現宮城県大崎市）などにも紹介されていたと記憶する。

宗近の門人兼永、国永は「五条」と称したがその居住地は不明と

ある。宮内庁蔵、旧伊達家蔵の「鶴丸国永」が有名である。

鎌倉時代には粟田口の刀工が活躍し、特に武芸を好まれた後鳥羽天皇の御番鍛冶に備前鍛冶に混じり粟田口藤三郎国安、粟田口藤林国友が見え（東寺観智院正和本銘尽）、粟田口国家の六人の子国友、久国、国安、国清、有国、国綱の内であるという（久国は閏月番鍛冶）。国友の子が則国、その孫弟子が粟田口藤四郎吉光で、江戸時代には正宗・郷義弘とともに天下三作と讃えられた名工である。

現在山城刀工の作品は国宝十七口となっているが、最近の刀剣研究書（註一四）によると鎌倉・南北朝期に活躍する、渡来人の末裔と称する来派は居住地も定かでなく、その後の山城刀は室町時代には地方の名工に圧倒されてしまい、新刀期の埋忠明寿、堀川国広、伊賀守金道らの活躍後は大量生産された奈良刀などの仕入れ、小売りが中心になってしまう。三条・粟田口の名声はまさに日本刀完成期の一時期の栄光であった。

（二）なぜこの地域に刀剣伝承があるのか

平安京から東国に向かう主要道路の、京域の外れ近くに何故鍛冶があり、刀匠伝承地が集中しているのだろうか。

最近の考古学調査で全国的に増加してきたのは地方官衙周辺の鉄製・加工遺跡の発見である。代表的な例は昭和五四年から調査された茨城県石岡市の鹿の子C遺跡であり、東北開拓の後方兵站地である常陸国府の北に鉄加工を中心とした整然と並ぶ工房群が出土し

た。遺跡の検討会が開催され、武器・武具の遺品も出土していることが報じられた（註一五）。時代は九世紀であるが、この前後の東北地方での軍事行動が活発だった時代には茨城県北部から福島県浜通地方を中心とした地域に大製鉄遺跡群があり、出羽国の後方地方である北陸地方にも似た遺跡群が発見されつつある。

これらの鉄関連遺跡は軍事行動に必要な膨大な鉄素材とその加工製品の需要により形成され、最終的には内郡化した東北北部まで拡散し、規模を縮小して古代を通じて鉄の製錬・加工が行われるのであるが、その軍事行動の中心地である都からの出陣には示威目的も含めて大量の武器・武具の生産が必要であったはずである【図版八】。そのため鍛冶工房群が所在したのが三条・五条大路の東から栗田口であったのではあるまいか。



【図版八】京都時代祭で考証復元された「延暦武官列」。都からの出陣にはこのような威儀が必要だったのであろう。

日本で主流であった砂鉄資源を製錬する製鉄遺跡は製錬炉、炭窯、工房と労働者の居住設備などの遺構、膨大な鉞滓、炉壁、轆羽口などの遺物が残るが、加工工房ならかなりの規模でも遺跡・遺物はあまり残らず、表面観察による遺物の発見も限られている。その点で井戸や泉を手がかりにした伝承が近世以後であっても文献に残っているのは貴重である。「軍事と造作」終焉の後には街道沿いのよろず鍛冶屋として民需もあり、説話文学にも残るような鍛冶集落が後まで残ったのであろう。

同時にこの地域には東国における軍事技術の動向がいち早く伝えられ、技術改良の中心地となったことも考えられる。騎馬戦闘における反りのある片刃の太刀が「奥州刀」として届けられ、戦訓とともに改良され一応の完成を見たのがこの「三条」銘の太刀であったと考えるのが無理なく理解できるのではないだろうか。

古刀の銘尽には名刀とされながら刀匠名のみ伝わり、現物は遙か後世の物しか伝わらないものがある。その代表に「舞草」「月山」などと「奥州・出羽」の刀匠と伝える一群の刀匠がいたが、刀剣鑑定が盛んな時代には「当代に用いず」と消えてしまっている。室町時代の『尺素往来』に羅列される「遺（鑑）刀 長刀、及太刀、腰刀」の名刀匠に古代の「天国、雲同」と共に「月山、舞草」が三条小鍛冶宗近、栗田口、来派と並び「干将莫耶、吹毛、太阿……不動の利剣」に劣らぬ名刀であるとされている（註一六）。この「奥州刀」

の消滅してしまった技術が山城の古刀につながり、技が生きのびていたとすれば、誠に興味深く、奥州刀を追跡した事のある筆者には（註一七）貴重な地と思われた。

余論になるが世界の金属考古学では「冶金術のセンター」metallurgical centerという言葉がある。自然銅の利用、酸化銅鉱の製錬、製錬のより難しい硫化銅鉱の製錬、錫青銅・ヒ素青銅などの合金利用、鉄鉱石の還元、鉄の浸炭・脱炭、熱処理などの新技術は鉱山地帯や大都市の金属工房に周辺地域から集まった人々を中心に開発され、そこから諸国に、人種・言語・国家等と無関係に流浪の工人により拡散していった、という説である。これは最近のハイテク技術の、技術開発先進国から途上国への流出なども合わせ考えての説であろうが、平安京の東国への入り口に集まった鍛冶のグループが期せずして日本刀のメタラジカルセンターの役をはたしていたのだとすれば、誠に興味深い事である。

- 註一二 本間順治 『日本刀』 岩波新書 昭和十四年
- 註一三 佐藤貫一 『山城鍛冶』 至文堂日本の美術一〇七 昭和五〇年
- 註一四 田野邊道宏 『日本刀五ヶ伝の旅・山城伝編』 目の眼社 二〇一五年
- 註一五 古代を考える会編 『鹿の子C遺跡の検討』 一九八六年
- 註一六 「尺素往来」『群書類従』 消息部 所収
- 註一七 野崎 準 「もう一つの東北地方の鍛冶技術」 東北学院大学東北文化研究所紀要第三五号 二〇〇三年
- （補註） 末永雅雄博士は来派の居住地も栗田口であったとされる『日本武器概説』 社会思想社、昭和四六年）。

六 おわりに

平安京と都への通路に関して何か「みちのく」と関係する物がないかと探していると、栗田口周辺に刀匠と鍛冶の伝承地が多いのに気がつき、しかも日本刀成立期の三条小鍛冶宗近に関わる遺跡が多く、それが三条通の東、栗田口にあるのに気がついた。

中・近世に工業都市でもあった京都は鍛冶業者も多かったようで、現在の郵便番号簿で見ても東山区に栗田口鍛冶町の他上京区に上鍛冶町、中京区に鍛冶町・鍛冶屋町・横鍛冶町、下京区と伏見区にも鍛冶屋町がある。江戸時代初期の京都案内『京雀』には「かち屋町」「かち町」「町内かち屋おほくあり」などが三六カ所もあり、製品が特化している鍛冶屋町には「釘かすがひ」「槍矢の根」などもあるが大半は「よろず打物鍛冶」で注文次第で何でも造ったようである。また『毛吹草』には山城の名物に「鑢、剃刀」「包丁」「針」「仕立刀」「太刀」等が見えるが、この時代には刀匠の名や製作地は見えない。

その中で栗田口周辺に刀匠の伝承地が多いのに注意して考察してみた。

刀匠居住地伝説は江戸時代に将軍、大名家の間に名刀の贈答が盛んになり、特に栗田口吉光の作が正宗・義弘と並ぶ名作とされたこ

とから、牛若丸弁慶の遺跡の如く近世以後の捏造観光名所だとする説もある。ただし伝承地の立地と井戸などの所在を考えるとそう無下に否定できるものではないと思われた。更にこの地は謎に包まれている日本刀の起源にも関わる遺跡・伝承地であり、今後の考古学的発見に期待して問題提起とした。

京都の東国への出入り口に刀工、それも日本刀成立期から完成期にかけての居住地の伝承があること、それは古代国家の東国開拓、武士団の勃興と実戦による東との情報交換と技術改良の地であり、従ってここが日本刀製作技術の始原の地の一つではないかと考証して見た。

「みやことみちのく」の関係はかような分野でも資料が多く、未だ気づかれない研究材料も多いと考え、残された時間をその探求に当てるつもりである。今回も多くの方々から資料提供、ご助言を頂いたことに感謝して筆を置く。

（平成三〇年九月三日）